

## 第2回瀬戸市基本構想審議会 議事録

- 1 日 時：令和7年12月15日（月）午後2時から午後4時まで
- 2 場 所：瀬戸市役所 北庁舎4階庁議室
- 3 出席者：瀬戸市基本構想審議会委員13名（うちオンライン参加3名）
  - 石川 良文（南山大学総合政策学部 教授）
  - 鷲見 英利（株式会社官民連携事業研究所）
  - 林 ともみ（ラジオサンキュー／瀬戸市障害者地域自立支援委員会）
  - 橋本 美香（大橋運輸株式会社）
  - 神田 すみれ（多文化ソーシャルワーカー）
  - 梅村 佳範（朝日インテック株式会社）
  - 浦田 真由（名古屋大学情報学部 准教授）
  - 伊藤 和真（株式会社PoliPoli）
  - 吉澤 克哉（東海旅客鉄道株式会社）
  - 野々垣 賢人（瀬戸くらし研究所／株式会社きんつぎ）
  - 石川 圭一（土街人プロジェクト／株式会社双寿園）
  - 堀部 篤樹（愛知産業大学通信教育部造形学部 准教授）
  - 水谷 香織（名古屋学院大学現代社会学部 准教授）
- 瀬戸市長 川本 雅之
- 事務局（瀬戸市企画部政策推進課）6名
- 4 傍聴者：4名
- 5 議題及び議事内容：以下のとおり

発言者	内 容
1 開会（市長あいさつ）	
市 長	<p>お忙しい中出席いただき感謝申し上げます。</p> <p>第1回審議会では、「2040年を見据えたこれからのまちづくり」について活発な意見交換をしていただき、非常に素晴らしいご意見を頂戴した。特に、市外の視点からの評価の重要性、民間企業との共創の必要性などが印象深く感じられた。</p> <p>今回も、瀬戸市での理想の暮らしの実現に向けて、活発な意見交換をお願いしたい。</p>
2 協議事項「2040年の瀬戸市での理想の暮らしを描く」	
事務局	（資料の要点を説明）
【論点1】第1回審議会でのキーセンテンスの深掘り	
(1) 瀬戸らしいダイバーシティを実現する	
石川会長	<p>協議事項の論点1では、3つのテーマについてそれぞれ意見交換を行う。各テーマで話題提供者から2分程度話題提供いただき、意見交換に移りたい。</p> <p>まずは、「瀬戸らしいダイバーシティを実現する」について、神田委員、橋本委員、石川委員よりお願いしたい。</p>

発言者	内 容
神田委員	<p>2025年6月時点での外国人人口比率（全国平均）は3.2%。瀬戸市においては、2024年時点で3.95%であり、全国平均を上回る。</p> <p>外国人人口の国籍構成に目を向けると、朝鮮・韓国については、全国的にも特別永住者が高齢化や帰化の影響で長期的に減少傾向にあり、瀬戸市もこれと同じ推移をしている。中国について、全国では引き続き中国籍が最大規模で増加しているが、瀬戸市においては留学生の減少や技能実習の送り出し国が近年ベトナム等へシフトしてきた流れが影響し、減少傾向である。ブラジル・フィリピンは日系人も多く、今後も地域に定住していくケースが多いと考えられる。その他、ベトナム、インドネシア等も、全国における流れと同様に増加傾向にあり、国籍は多様化している。こうした状況を踏まえ、背景が異なる人たちが暮らしていることを前提に、教育や労働、高齢者の施策を組み立てる必要があると考えている。</p> <p>教育施策では、小・中学校における支援員の配置の適正化を図る必要があるのではないか。また、初期指導教室は来日直後の約3か月で日本語の基礎と学校の生活のルールなどを身につける日本社会での最初の接点でもあり、世界の未来を担う人材の土台づくりともいえる大切な支援場所として充実が求められる。</p> <p>労働施策では、2033年までに留学生40万人の受け入れ計画を含む目標が全国的に掲げられており、すでに新卒の留学生の就職や定着支援事業が進められている。本市でも地元の企業による新卒の留学生の雇用や定着を推進してはどうか。また、技能実習が特定技能に移行すると最大で10年間住むことになるため、それを前提に、外国人を一定期間の住民として捉えて、地域活動、防災等、社会の担い手として考え、社会との接点をつくることも必要ではないか。</p> <p>高齢者福祉に対しても、今後20～30年後には、外国人住民の介護・看取りの問題が出てくると思う。在日コリアンの方達の中には、先駆けてこうした課題に向き合ってきている方もいるため、経験や知見から学びながら見守りや相談の場所の充実化を既存の施策に組み込む必要があるかと考える。</p> <p>多文化共生の必要性が高まる瀬戸市では、多様性と人権を尊重するまちづくりが施策の土台になると考える。そのためには、外国人住民だけに適応を求めるのではなく、地域全体で偏見や差別を生まない環境を整えること、対話の場を設定することが重要ではないか。</p>
橋本委員	<p>当社におけるダイバーシティ経営の実績について紹介する。まず、ダイバーシティ経営に取り組もうと思った背景に、深刻化する人手不足のトレンドがあり、当社の企業としての経営課題として、人材の採用・育成は大きな課題として位置付けられていた。採用力強化として、ダイバーシティ経営を一つの軸として設定し、長年取り組んできた。</p> <p>当社では、女性や高齢者、外国人、障害者、LGBTQも含め、各々の違いを受入れ、これを力としながら成長していくことを基本的な考え方としている。過去には、ダイバーシティ経営に関する研修を実施していたが、今では多様な人が支え合う風土が当たり前のように形成されている。</p> <p>取組は女性活躍からスタートしており、例えば勤務体制の見直しなど、人に仕事を合わせるという考え方で、管理職への登用等も勧めてきた。多様な人材の活躍は、発信力のある価値でもある。そういった企業が瀬戸市で増えていくということも、盛り上がっていく要素になるのではないか。</p>

発言者	内 容
石川委員	<p>やきもの産業において、例えば、絵付けはお母さん方が家の仕事をしながら隙間時間に行っていた等、ダイバーシティ経営に近い働き方を従来行ってきたと捉えることができる。経営的にうまく回っていない家族経営の会社もあり、こうした業態の会社がどんどんなくなってきているのが現状である。美濃焼の産地でみられるように、外国人人材の登用や、外国人による体験ニーズの高まりは業界として感じるところでもある。</p> <p>また、『土街人』の取組では、先日閉幕した芸術祭において、瀬戸の魅力を対外的に発信でき、一定人数瀬戸に関心のある人と関わりを持つこともできた。今後、このレガシーをいかに受け継いで、広げていくかということが求められている。そこで集まった関わりのある人達と意見交換などをつつ、瀬戸に少しずつ関わってもらえるよう、続けていきたい。</p>
石川会長	<p>本テーマに関する話題提供を一通りいただいた。ご意見・ご質問はあるか。</p>
石川委員	<p>神田委員にお聞きしたい。周囲から聞いた話の中に、ブラジル、ペルー人の住民に対する自治会活動への参加をお願いが、中々スムーズに進んでいかない現状があるということがあった。</p> <p>また、子どもが障害を持っているから動けないという話も聞く。この辺りがスムーズにできると、互いに良い形で伸びるのではないかと思う。こうした住民同士のコミュニケーションの問題について、どのような手立てがあるのか。</p>
神田委員	<p>自治会の活動として、外国人の役員と日本人の役員を両方立て、ペアとなって動くという方法をとっている事例がある。例えば、日本語の読み書きが必要な帳簿管理などは日本人会長が行い、家庭訪問、集金は外国人会長に分担するなど。大府市の梶田住宅では、自治会の役員全員を外国人とするという試みがされていて、高齢者の見守りが好評とのことである。町内会や自治会の仕組みについて、文化の違いにより最初は理解できなくても、こうした取組をとおして、外国人役員が外国人コミュニティに説明できるようになる効果もあるようである。</p> <p>まずは、ボランティアがなぜ必要かという説明をし、キーマンとなる外国人住民との関係構築から始めること等をきっかけとする考え方はあるかと思われる。障害を持つお子さんのケースは、外国人、障害、女性等の複数の困難が想定されるため、地域での支え合いの重要性を伝える機会でもある。</p>
梅村委員	<p>ダイバーシティに関して、ゴールがどういうものであるのかということが自分の中ではまだ漠然としている。個別・具体的な取組、事例は紹介いただいたので理解したが、こうした取組を重ねていき、最終的にどのような形が理想像として描かれるものになるのか。もし委員の皆さんの中に具体的なイメージがあればお聞きしたい。</p>
神田委員	<p>抽象的な表現になるが、一人ひとりの人権・個性が尊重され、それぞれの知見・経験が最大限発揮でき、関わり合えるようになることをイメージしている。</p>
林委員	<p>どんな環境でも、どんな背景であっても、各々がやりたいことを諦めずにやれる社会であってほしいと思う。障害のある子どもの例では、18歳までは放課後のサポートがあるものの、卒業後は福祉事業所後に利用できるサービスが大幅に減り、保護者が仕事を変えざるを得ない現状がある。保護者がキャリアを継続できる環境整備、障害者雇用促進や特例子会社を作るなど、障害者が働ける仕組みづくりが必要である。</p>

発言者	内 容
鷺見委員	<p>ダイバーシティを実現するためには、優秀な外国人に日本を選んでもらうことも重要な視点であるが、現在は外国人のニーズを把握できず、日本が選ばれていない状況にある。まず日本が選ばれることが前提で、その上で各都市が魅力をしっかりアピールし、外国人に効果的に伝える必要がある。</p> <p>外国人に選ばれる瀬戸市を目指すことが重要で、これは全国の自治体共通の課題である。外国人対応とダイバーシティ実現に向けたまちづくりについて、具体的な方向性を示していくべきだと考える。</p>
石川会長	<p>「外国人に選ばれるまち」とはどのようなものか。具体的に教えていただきたい。</p>
鷺見委員	<p>滋賀県甲賀市とベトナム総領事館との連携に携わった事例では、まちのPRをしてベトナム人を迎えていくことを提案した。当該地域は工業が盛んな街であり、外国人人材の活躍を促したいという意向が工業会からも上がっている状況であった。</p> <p>その過程の中で、「地域に住む日本人住民による受容」という視点も考慮する必要があった。そこで、外国人に対して、「日本に住むとは何か」という研修の実施に加えて、地域住民や企業の人たちに対して、外国人への理解に関する講義を行い、相互理解を促すことで、外国人にやさしいまちであることを理解してもらう仕組みとした。こうした取組を国に持ち帰ってもらい、伝播させる必要もあると感じた。</p>
石川会長	<p>形だけ作るのではなく、「ダイバーシティ」という言葉だけを独り歩きさせるのではなく、一歩進んだ具体的な相互理解の重要性が分かった。</p>
野々垣委員	<p>瀬戸市内のとあるコンビニで、一部の外国人に対して、「たむろしないように」という主旨が漢字で書かれた看板があるのを見かけたことがある。これは、一方的に外国人へのマイナスイメージを与えるものであり、当事者には読めないため意味のないものであると感じた。</p> <p>最初の一歩がわかりやすい、よりフランクなコミュニケーションが可能な環境が作れると、良いまちになるのではないかと。</p>
石川会長	<p>過去にオランダに居住していた時、言語の壁から地域とのコミュニケーションがとれないでいた経験がある。そのような中、近所の人から、誕生日パーティに誘われたことをきっかけとし、顔見知りになった人に対して、生活上の悩みを色々教えてもらうことができるようになった。</p> <p>相手の方から歩み寄ってくれたことによって、悩みが解消しやすい環境になった。瀬戸市でも、色々な方を受け入れる際には、気持ちだけではなく具体的な一歩を示すことで、相互理解が深まり、まちの発展につながるのではないかと。</p>
水谷委員	<p>名古屋市港区の事例を紹介する。港区では外国人人口が1割を超え、問題も色々出てきつつある。住民が、外国人住民とのコミュニケーションに悩んでいる中、自治会に対して外国人アドバイザー（日本居住歴20年以上）に入ってもらいつつ、外国人とのコミュニケーションの取り方を啓発する動画を作成し、発信している。参考のためにご確認いただければと思う。</p> <p>URL (<a href="https://youtu.be/gq9Jf8JHbdg?si=rqPb01F_xIVbg33H">https://youtu.be/gq9Jf8JHbdg?si=rqPb01F_xIVbg33H</a>)</p>

発言者	内 容
(2) 市民の瀬戸市に対する誇りを育む	
石川会長	<p>続いて、「市民の瀬戸市に対する誇りを育む」について、伊藤委員、野々垣委員から話題提供をお願いしたい。</p>
伊藤委員	<p>なぜ東京や名古屋ではなく瀬戸市を選ぶのか、という問いは重要である。周辺の豊田市、長久手市などが人口を増やしてきた中で、瀬戸市が人口を減らしているというのは事実である。</p> <p>個人的には3つの視点が関わってくると考える。1つ目に、藤井聡太氏や、山田進太郎氏、加納裕三氏をはじめとする存在感のある起業家、実業家を輩出した市として、市としてのプライドを感じさせる要素があると感じている。2つ目に、歴史的にやきもの産業を発達させてきた市として誇らしいと思わせる要素があると感じる。3つ目に、これは他市町村との差別化が難しいが、自然豊かなまちとしての価値もあると感じる。</p> <p>こうした価値を踏まえた上で、出身者が抱く感覚として、総合計画としては、まずは危機感を記載することを提案したいと思う。限られているリソースの中で、色々なことをやっていかなければいけないと考える。また、自分が色々和他市町村を視察している中で、「〇〇市と言えばこれ(子育てするなら流山、ローカルベンチャーなら西栗倉村、稼ぐ西川町など)」というようなブランディングの重要性は大きい。加えて、稼ぐという視点を持ち、まち全体に良いモメンタム・明るさが醸成されることが望ましい。</p> <p>理想を掲げた上で、実際にまちづくりにコミットしている人(行政、企業、地域の方など)同士が関わり合い、地道な活動がなされていることも重要であると感じる。</p>
野々垣委員	<p>シビックプライドという概念を整理すると、単なる地元愛、郷土愛とは異なり、自分たちでまちを変えていけるという当事者意識、自負心を含めた概念であると考えられる。</p> <p>瀬戸くらし研究所を作る際に、長久手市の若い職員と対談したことがある。長久手市民では、利便性の良さを評価した特定の年齢層の人たちが多く転入しており、将来的に利便性が維持できなくなったとき、地域の祭りなどの文化を継承することができるかということに課題意識を持っており、その点、瀬戸市は恵まれていると考えているという話を聞いた。瀬戸市は、長久手市とは様相は異なるが、外部から見たときにはシビックプライドが醸成される背景・文脈があるまちであると感じた出来事であった。</p> <p>ただし、行政がシビックプライドを打ち出しても、いきなり醸成されるものではないのが難しいところである。政策の役割は、完成したシビックプライドを伝え、広げるのではなく、市民間の言葉のやり取りや、コミュニケーションをいかに確保するかという点であると考えられる。市民一人ひとりの届ける言葉により、まちがどんどん変わっていく、声が反映されていくという感覚があると、シビックプライドが醸成されていくのではないかと。</p> <p>視点が少し変わるが、最近の若者の消費行動では「報われポイント」がキーとなるという記事を最近読んだ。これは行政分野にも言えると考えられ、目に見えやすい価値の裏にある潜在的な価値が認められることも、今後重要になっていくのではないかと。</p>
石川会長	<p>本テーマに関する話題提供を一通りいただいた。ご意見・ご質問はあるか。</p>

発言者	内 容
梅村委員	<p>瀬戸市に良いところが沢山あるというのは同感である。一方で、長久手市のように、便利な市だからこそ、そこに住むことを決める人が多いということもまた認めなければならぬと考えており、定住人口の増加は税収の増加にもつながる。</p> <p>シビックプライドをくすぐるものは、住んでから重要であるが、住む前の人、市外の人に対していかに訴求するのかということ、真剣に考えないといけないと感じる。稼ぎ方という視点も大切にすべきだと考えている。</p>
橋本委員	<p>自身は生まれも育ちも瀬戸で、一度外に出てから戻ってきた。現在は、同じような経緯をたどって瀬戸市に住んでいる同級生に会うことも多い。その中で、土地が安いのが良いという話はよく上がる。土地の安さというのは、市内に戻ってくる、移り住むという意思決定を支えている大きな要素であり、これを売りとして押し出すことも、市外に対するアピールポイントになるのではないかと。</p>
石川会長	<p>生まれ育つ過程で、年配の方々から、「瀬戸が今後衰退するのでは」という話をよく聞いていた。これは、1980年代くらいに陶磁器産業が衰退していた当時の社会背景を要因にしていたことでもあると思う。</p> <p>大人になってから改めて振り返ると、必ずしも瀬戸市は悪いイメージばかりでないことも分かってきた。住民同士のコミュニケーションの中で誇りを持てるようになると良いし、愛着や誇りがいかに人口の定着に繋がっていくのかという視点は、考えていかなければいけないと思う。</p>
堀部委員	<p>1つ目のテーマにも関連するが、ダイバーシティの観点では相互理解の話が出ていた。その中で、分からないものに対する恐怖という考え方もあるかと思う。その点で、知るといふことの重要性は大きく、学校教育の中でも、科目としての英語に限らない外国に関する理解促進がなされると良いのではと感じるところである。</p> <p>誇りの話になるが、市役所職員の案内で瀬戸のまちを歩いてみたとき、独特の魅力や突っ込みどころが多くあることに気付いた。瀬戸市の人々が瀬戸市のことを下げて発言していたのを聞いていたこともあり、無意識に瀬戸市のことを低く見積もっていたが、やきものまちとして瀬戸市が持つ価値は十分に大きく、外から若者やクリエイターを引き寄せる大きな強みを持っていると感じた。そうした地域の魅力を大人だけでなく子どもに知ってもらうことが重要であり、ダイバーシティや誇りに関して、子どもたちを巻き込みながら話をしていける機会があると良いのではないかと。</p>
橋本委員	<p>会社で地域活動をしていると、「陶生病院より市外の総合病院の方が良い」という話を地域の人から聞くことがある。陶生病院は、医療従事者の離職率は低く、設備も整っている良い環境であるのに、それが知られていない現状がある。また、海上の森もかなり魅力的な場所であるが、地元の人には十分に理解されていないと感じる。</p> <p>会社では人事も担当しているが、学生との対話では「地元でキャリアは積めるのか」という質問をよく受ける。地元の中小企業は様々なことができ、その人に合った部署に配属してくれるなど、柔軟な対応ができることを説明すると、「地元に戻って見てみよう」と興味を持ってくれる学生も多い。</p> <p>瀬戸市民に対して、瀬戸市の「今」を知ってもらうことが重要なのではないかと。</p>

発言者	内 容
(3) 関係人口・共創人口を増やす	
石川会長	<p>続いて、「関係人口・共創人口を増やす」について、鷺見委員、吉澤委員から話題提供をお願いしたい。</p>
鷺見委員	<p>官民連携事業を行う中で、各自治体の大きな課題になるのが、人口減少、労働者不足である。また、今後の自治体運営において、企業との連携により気づきやひらめきを得たいと考える様々な自治体による官民連携への関心は、高まっていると感じる。その中で、関係人口・共創人口について考えると、ふるさと住民登録制度、企業版ふるさと納税が具体的な取組になるかと思う。</p> <p>普段、東京や大阪で活躍している方も仕事で関わるが、「故郷に錦を飾る」ことに意欲のある人が非常に多いと感じる。自分も10歳から住んでいる大阪府・四条畷市に特別参与として関わり、故郷に錦を飾らせていただいているが、そうした活動によって晴れやかな気持ちになり、かつ自分のキャリア形成にも繋がり、自分のアイデンティティの向上にも寄与している。</p> <p>このような人材を増やしていくことは、先ほど話があった「誇りを育む」ということと、同じような意味合いがあるかもしれない。そういった流れを関係人口・定住人口を増やす原動力にしていくことは、非常に重要だと考える。</p> <p>もう一つ、最近のトレンドで言うと、行政、民間企業の1対1の官民連携だけではなく、「行政×大企業×地元企業」、「行政×大企業×スタートアップ企業」といったコンビネーションのあり方も増えてきている。企業にとってもビジネスチャンスになる非常に良い話であり、行政としても良いシティプロモーションとなる。</p> <p>プロジェクトをとおして、多岐に渡る関係者を巻き込んだ連携を行うことで、様々な意味合いが折り重なる効果が生まれるため、こうしたプロジェクトにフォーカスしていくのも良いのではないかと。</p>
吉澤委員	<p>JR東海で「conomichi(コノミチ)」という共創型ローカルメディアを運営している。関係人口も実は減少しているというファクトがあり、限られたパイを奪い合う状況から脱却する必要があるのではないかと問題意識がある。これまでの「地域を訪れる人がどれくらい消費をしていくか」という観点ではなく、「訪れた人がどれだけ地域の人と関わって、価値創造をして、生産活動をしていくか」ということを目指していくべきと考えている。</p> <p>瀬戸市としては、コアな共創人口に対して、いかにツクリテ側に回ってもらうかという観点が重要であり、これに活かしやすい地域資源があるということは大きな意味があると感じる。</p> <p>中津川市で実施している事例では、地域の中の人、外の人を交わせるプログラムを実施していて、プログラムが終わった後で、運営者側から働きかけをしなくても、何らかのプロジェクトが生まれるようになっている。地域の中の人目線では、普段出会えない人と出会えて、自分たちのビジネスに色々なことを活かしたり、地元の地域資源に気づきを得たりすることができる。地域の外の人からすると、一度関わったコミュニティがあることで、スムーズに地域と関わることができ、これを維持できる。こうした積み重ねが、関係人口の話や、ダイバーシティの話につながるまちの価値向上につながるのではないかと。</p>

発言者	内 容
吉澤委員	<p>瀬戸市内の人に色々と話を聞くと、共創的なプロジェクトやイベントが多くあるという印象を受けた。行政としては、コアになるようなプロジェクト等をつくって、プレイヤーにどう入ってもらうか仕組みをつくるのが、一つの方向性としてあるのではないか。</p>
石川会長	<p>本テーマに関する話題提供を一通りいただいた。ご意見・ご質問はあるか。</p>
伊藤委員	<p>驚見委員のお話に同意する。官民連携の視点は計画内での位置づけも必要になると感じている。昨今の社会的潮流を考慮しても、この視点を入れないということは考えにくいのではないか。</p> <p>指定管理者制度については既に活用されていることと思うが、例えばP-PFIやSIB等、民間にインセンティブを付与するような官民連携の在り方、ソフトでの連携の在り方を検討いただけると良いのではないか。</p> <p>視点は少し変わるが、国・自治体共に、政治への不信感の問題はある。これには、政策への関係人口が薄いことに起因し、市民との関わりが薄いまま事業を進めることで発生した負のスパイラルがあるかと思う。</p> <p>これに対して、政策の意思決定のプロセスを、市民と行政の信頼関係を基盤として築くような好循環に持ち込めると良いと思う。</p>
野々垣委員	<p>吉澤委員から地域外の人と地域コミュニティの接続の話があったが、市内に活発なコミュニティがあっても、市外の人との出会い方は偶発的なものであるケース（たまたま参加したイベントで出会った、たまたま飲食店で隣の席になった、など）が多い。偶発的な出会いでもなければ市外との接点を持たないというのが実態としてあるかと思う。市外の人が自分に合ったコミュニティに接続できる仕組みづくりを施策として考えられると、関係人口、共創人口に繋がっていくのではないか。</p>
堀部委員	<p>関係人口・共創人口を考えるにあたり、東京の人口ばかりが増えていくという前提をこれからも持ち続けるのかということを確認したい。</p> <p>また、瀬戸市としては、どの層を対象にした上で関係人口・共創人口を集めていくと良いのかということもお聞きしたい。</p>
水谷委員	<p>今後、50～100年でみると、日本の総人口は10分の1にまで減少するという推計もあり、これを基調として施策を考える必要がある。本日の議論を聞いている中で、良い視点の楽しい事業が沢山生まれてきそうだと思う一方で、人口減少というリスクに対応するための視点というものも考えなければならないと感じる。</p> <p>人口減少は必ずしも悪いことばかりではなく、「限られた資源が余裕をもって使えるようになる」というような、良い意味で捉え直す議論もできると良いと思う。</p>
石川会長	<p>全国的な出生率が1.3程度の前提で、2100年くらいには人口は約6千万人に減少するという推計もある。出生率をもう少し高められるようにし、人口を維持するというのが一つの考え方であると思う。</p> <p>また、東京や大阪のような大都市圏では今後もある程度の人口維持は見込めるとされている一方、地方については、魅力のあるところは維持でき、魅力のないところは急速に人口を減らすということが推測される。定住人口や関係人口・共創人口から選ばれ、今後残れる地域になれるかどうかは、こうした基調の中で考える必要がある。</p>

発言者	内 容
吉澤委員	<p>関係人口・共創人口のなり手を集める上では、東京をはじめとする三大都市圏に対して働きかけることが多い。東京には、地域へのつながり、まさに実際に貢献しているという感覚を潜在的に求める人が多く、こうした都市圏に働きかけるのが、データ上の反応が良いという状況である。実際に、東京から来た色々な人が関わり、盛り上がっている地域があるという感覚も持っている。</p> <p>テーマによっては、近隣の地域の方が、高感度であるというケースもある。</p>
浦田委員	<p>愛知県はものづくりの県としてのイメージが強く、就職の際に選ばれにくいという現状はあると思われ、こうした状況を踏まえて考えていくことが必要である。</p> <p>また、官民連携に関する話もあったが、瀬戸市らしい官民連携とは何かということも考えられると良い。事例だと、飛騨市で実施されている「ヒダスケ!」、「飛騨ファンクラブ」のような取組は特徴的であり、こうした奇抜なことも瀬戸市のアピールのためには有効なのではないか。</p> <p>官民連携事業は、維持する方法や、予算がつかなくなるなど、いかに成果につながるまで継続させるかということを考えるのが難しく、上手に回るような仕組みが構築できると良い。</p>
【論点2】 将来のまちづくりに活かしたい瀬戸市の付加価値・ポテンシャル	
石川会長	<p>続いて、論点2について、意見交換を行う。</p> <p>将来のまちづくりに活かしたい瀬戸市の付加価値・ポテンシャルについて、ご意見のある委員はいるか。</p>
橋本委員	<p>社会福祉協議会と協働して、運動教室、地域の健康プロジェクトを立ち上げている。そこでの反響を見ていると、高齢化が進行する中における「健康」に関わる関心度は高いと感じる。</p>
伊藤委員	<p>「人口・産業を増やす」、「来た人を離脱させない」という視点が重要なのではないか。これらに対しては、やきもの産業を核としたクリエイティブ人材の存在を強みとできるのではないか。</p> <p>他市でも活発な分野における産業に参入して競争を勝ち切るという方向ではなく、瀬戸市ならではの独自性をもってさらに窯業の付加価値を高めたり、事業承継を行ったりすることができれば、大きな強みとできるのではないか。産業構造の変革や、付加価値の向上については、瀬戸市が一体となって高められると良いのではないかと思う。</p>
石川委員	<p>やきもの業界では、家族経営の会社の後継者不足は深刻な問題。愛知県陶磁器工業協同組合が100周年を迎える今、事業承継は重点的に取り組むべきことであるという話が出ている。事業継続や担い手確保のためには、稼げるようにすることが必要。その過程では、単価の上昇は課題となる。</p>
伊藤委員	<p>石川委員にお聞きしたい。民間の取組が行われていくということに対して、行政はどのような関わり方をすることが理想的と考えるか。</p>
石川委員	<p>瀬戸市内には様々な規模の窯があるが、作家だけを生業としていこうとする人は少ない。作家としての活動に加えて、これを世に広めていく窯屋が出来たり、分業・外注を駆使して地域にお金の流れが生まれるような構造が出来ると、瀬戸焼としての価値向上が見越えるのではないか。</p>

発言者	内 容
林委員	野々垣委員が司会をされたイベントで、「KURABITO STAY（長野県佐久市）」の紹介があったが、それを聞いていて、やはり瀬戸市は瀬戸焼だなと感じたことがある。市内にずっと住んでいると、この価値は分かりにくい。「せともの」というものをどんどん前面に押し出していけると良いのではないかと。また、瀬戸市が輩出している人的資源も大事になってくると感じた。
野々垣委員	「KURABITO STAY」では、酒造りを付加価値として、お酒を造る上でのストーリー込みの体験を付加しているのが大きな特徴。例えば、お酒造りをする時にも、お祈りをしてから臨むのだというような一連の流れを組み込んでデザインされている。これを参考とするなら、瀬戸市ならではのストーリーや、リアルなデザインを考えていけると良い。
吉澤委員	単に「やきものまち」というだけではなく、やきもの以外の資源も含め、それぞれが当事者として関わることでできる物語性を付加できると良い。
石川委員	瀬戸市の場合は、土の取れる鉱山とのつながり、一度はげ山になったことによる豊かな植生のある山等、知られていない魅力、深い魅力がある。こうした情報は聞かなければ分からないので、知られていないことをいかに発信していくかということを中心にできると良いと感じる。
堀部委員	今の石川委員の発言について、そういう話を子ども向けにもしていけると良いと思うが、現在、そうした試みを実施する機会はあるのか。
石川委員	職場体験の場などで、やきものを製品化して世の中に届ける一連の流れを伝えることはある。
堀部委員	石川委員のような、地元を盛り上げられる若い世代の人材を大事にしていけると良いと感じた。
石川会長	<p>本日議論した論点は全部が繋がっている話で、個々のテーマで話がずっと続けられる深みが瀬戸市にはある。この10年間で良い雰囲気も生まれてきているとも感じる。</p> <p>瀬戸市は古くからダイバーシティのまちであり、外国人が多くいるが、現在全国の一部地域で取り沙汰されているような大きな問題もない。外国人人材との関わりの中で生まれた好事例もたくさんあることと思う。また、若い世代を中心に関係人口・共創人口と言え人の繋がりもできつつあり、こうした観点からも「何かしよう」という機運の高まりは感じられるところである。</p> <p>一方で、こうした機運の高まりが、市民にはあまり知られていないと感じられる側面もある。また、若い世代の頑張りによって何とか持続している感覚もあり、行政としての下支えがなければ継続が厳しいのではないかと危機感を感じることもある。</p> <p>様々な視点を踏まえて、総合計画では何をやるかということを考えていただきたいが、本日挙げられた意見や、様々な調査で得られた市民の声などを咀嚼し、総合して良い計画を検討いただければと思う。</p>
3 その他	
事務局	(第3回審議会の予定について報告)
4 閉会	

以上